

大学生における「なく中止形」

—アンケートによる 20 年間の動向—

金澤 裕之

1. はじめに

私が、若者を中心とする現代の言語変化に関する研究を始めたのは、岡山大学文学部在職時の、1990年代後半である。それまでは、戯作や落語資料といった、従来の国語史研究において見過ごされがちな資料を利用して、その分野において空白部分に近かった江戸後期以降の大阪のことばを、主に通時的側面から追究していたが、その仕事が一段落を迎えていた時期ということもあって、さまざまな場面で気になっていた、当時の若者に見られる新しい言語変化の現象を、主に文法的な変化の面から追究してみたいと思うようになっていた。そして、そうした現象のうち一番手の対象として選んだのが「なく中止形」についてであった。

「なく中止形」というのは、私自身が名付けた名称で、従来は「～(せ)ず、…」という形が規範的であった動詞の否定の連用中止法において、助動詞の部分を「ず」から「ない」に置き換えた、「～(し)なく、…」という形式の連用中止法のことである。このテーマに関する最初の論文は、その当時に国立国語研究所によって創刊された研究雑誌『日本語科学』1号の「研究ノート」として掲載された、「助動詞「ない」の連用中止法について」(1997.4)であった。ここでは、当時、目視によって辛うじて発見できた、書きことばにおける16個の「なく中止形」の用例と、それらの用例を活用した形の大学生へのアンケート結果が、「なく中止形」というものの実在をアピールするための、私による証明となるものであった。

本稿では、1996年に実施したこの最初のアンケート結果を受け継ぐ形で、その後、ほぼ十年後(2005年)と二十年後(2015年)に同様の条件で行った大学生へのアンケート結果を紹介し、「なく中止形」という新しい用法がどの

ような形で大学生に使用されつつあるのか、その動向について報告してみたい。

2. 「なく中止形」アンケートについて

前節でも触れたように、書かれた資料からのわずかな例を参考として、「なく中止形」の実際の使われ方(許容度)を知るために、アンケートを実施した。その対象としては、大量調査のしやすさ、および、この種の新しい(と考えられる)用法が生まれている可能性として、中高年層よりも若い世代の方が高いと考えられることを考慮して、大学生を選んだ。そして、実際の検証方法としては、まずはこうした用法が実際に彼らに使用されつつあるのかどうかということを知るのが第一と考え、既にある用例を利用した文脈を設定した上で、問題の部分をブランクとし、そこに彼らにとって自然な表現形式を記入してもらおうという形式をとった。

第一次のアンケートは、1996年11月、岡山市内の三つの大学で実施した。対象となった学生は全体で634名(女子428名、男子206名)である。(調査の意図を探られないように、質問項目にはダミーの問題もある程度混ぜた。)なお、記入の仕方についてこちらからは特に細かい注意は与えず、文脈から判断して、1~4文字程度で自由にブランクを埋めてもらうという方法をとった。そのため、原因・理由の表現にしたものや意味の通らないもの、更には方言での回答などがある程度の数見られたが、それらについては考察の対象から外した。(以下の表の中で「計」の数字が異なっているのは、そうした事情による。)

そこで提示した具体的な例は、次の通りである。

- (a) 最初は何の味も(), 少し不安になったが、次第に本来の味が出てきた。
- (b) この地区には新しい住民はほとんど(), 人々はみな家族同様の付き合いをしている。
- (c) その言語は、構造を簡単に理解することができ(), 習得も難しい。
- (d) 当時は運動の実態もあまり知られて(), 協力する人は少なかった。
- (e) 懸命に頑張ったが、我々の抗議は認められ(), 得点も入らなかった。

- (f) 新しい政府がどのような方針で対処するかは予想もつか()、不安な気持ちに陥ることも多い。
- (g) コンニャクは包丁で切ら()、手でちぎった方が、味がよくしみます。

このうち (a) ~ (f) は、実例の中から性格やタイプが異なると考えられるものを1つずつ選んで、それを部分的にアレンジしたものであり、(g) はそれらと性格的に異なると考えられる例を、寺村秀夫『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』の例文 (p.218) を参考に一つ加えたものである。

アンケートへの記入結果は、次の表1の通りである。

表1 「なく中止形」アンケートの結果

	(c) ~ができ —	(e) 認められ —	(f) 予想もつか —	(g) 包丁で切ら —
ず	436 (85.0)	598 (96.0)	531 (87.9)	275 (44.1)
ずに	2 (0.4)	3 (0.5)	7 (1.2)	221 (35.5)
なく	15 (2.9)	9 (1.4)	31 (5.1)	—
なくて	13 (2.5)	13 (2.1)	20 (3.3)	—
ないし	47 (9.2)	—	15 (2.5)	—
ないで	—	—	—	127 (20.4)
計	513	623	604	623

	(b) 住民は —	(d) 知られて —
おらず	384 (64.1)	288 (55.7)
いず	46 (7.7)	13 (2.5)
いなく	39 (6.5)	30 (5.8)
いなくて	32 (5.3)	16 (3.1)
なく	95 (15.9)	132 (25.5)
なくて	3 (0.5)	38 (7.4)
計	599	517

	(a) 何の味も —
せず	334 (57.4)
しなく	15 (2.6)
しなくて	33 (5.7)
なく	167 (28.7)
なくて	32 (5.5)
しないで	1 (0.2)
計	582

さて、ここで注目している「なく中止形」に焦点を絞ってみると、その記入(使用)状況については、次の表2のような結果が導き出せることになる。

表2 「なく」中止形の記入(使用)状況(1996年)

	住民は い— (b)	知られ てい— (d)	予想も つか— (f)	~がで き— (c)	何の味 もし— (a)	認めら れ— (e)	包丁で 切ら— (g)
割合(%)	6.5	5.8	5.1	2.9	2.6	1.4	0.0
人数(人)	39	30	31	/15	/15	9	/0

3. 第二次・第三次アンケートについて

さて、これまで述べた 1996 年（第一次）における状況が、十年・二十年後どのような変化を見せるかを調べるために、2005 年（第二次）および 2015 年（第三次）に、前回とほとんど同様のアンケート調査を実施してみた。調査票と調査方法は前回と全く同じものを用い、調査対象も、場所は横浜ならびに東京ということで異なるが、前回に近い人数（九割強）に当たる 580 名（女子 316 名、男子 264 名）・580 名（女子 475 名、男子 105 名）の、二回に共通の三大学に所属する学生たちである。

前に掲げた表 2 に倣って、この二回における「なく中止形」の記入（使用）状況についての結果を示すと、次の表 3・4 の通りである。また、間に十年ずつの間隔を置いた三回の調査結果の推移をグラフの形で示すと、図 1 のようになる。

表 3 「なく」中止形の記入（使用）状況（2005 年）

	住民は い— (b)	知られ てい— (d)	何の味 もし— (a)	～がで き— (c)	予想も つか— (f)	認めら れ— (e)	包丁で 切ら— (g)
	>	>	>	>	>	>	>
割合 (%)	20.4	12.3	5.8	4.5	4.3	2.3	0.0
人数 (人)	103	63	30	23	22	13	0

表 4 「なく」中止形の記入（使用）状況（2015 年）

	住民は い— (b)	知られ てい— (d)	何の味 もし— (a)	予想も つか— (f)	～がで き— (c)	認めら れ— (e)	包丁で 切ら— (g)
	>	>	>	>	>	>	>
割合 (%)	11.6	9.2	4.8	3.9	3.8	1.6	0.0
人数 (人)	60	47	25	20	18	9	0

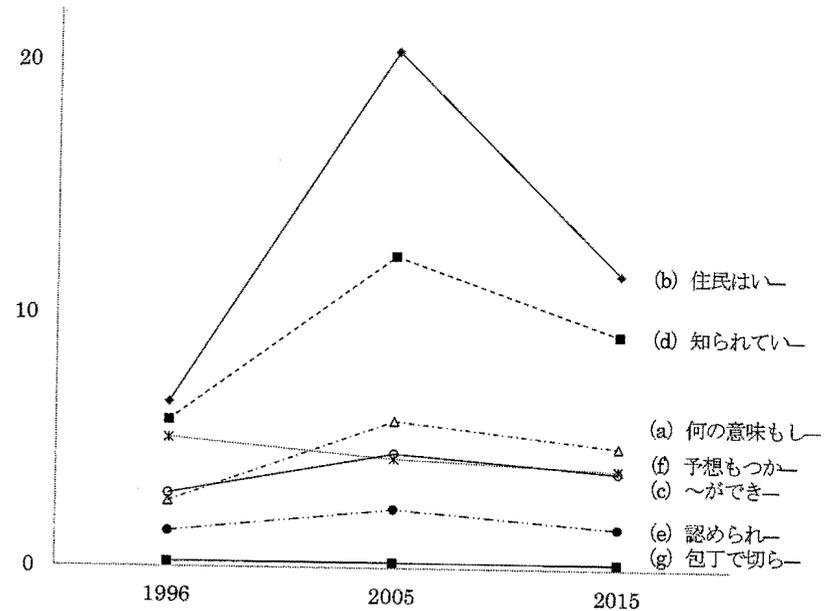


図 1 3 回の調査結果（1996・2005・2015）の推移

4. 結果の考察

前節で示した図 1 を見て、特に興味深いと思われるのは、次のような諸点であると考えられる。

- (i) 全体として見ると、第二次の 2005 年にはほとんどの場合で割合が大きく上昇したが、第三次の 2015 年では、全ての場合で第二次より減少し、結果的に、第一次と第二次の中間位の割合となっていること。
- (ii) 計 3 回の調査において、一部分だけ (a と f と c の) 順番の異同があるが、それを除くと、七つの例の割合による順序は、ほぼ安定していること。
- (iii) g の「包丁で切ら」の場合は、第一次から第三次まで、二十年の経過を経ても、依然として 600 名近い回答者の中に、一人も「なく中止形」を記入する者がいなかったこと。

まず (i) と (ii) の点に関しては、第二次の 2005 年の結果が象徴的であると言える。ここでは、数値の高いものほどより変化 (増加) の度合いが大きいという関係が見られ、この結果を言語変化のあり方として考えると、先行するもの (例えば (b)) は、より変化が進む方向に動いてゆくのにに対して、後方に位置するもの (例えば (e) など) はなかなか変化を受け容れない、というパターンだと思われる。第三次の 2015 年においては、全体に数値は (第二次より) 減少しているが、上記の点に関しては、一応同様の傾向が維持されていると言えよう。

なお、そうした傾向を確認した上でも、第三次において、(第一次よりはある程度増加しているとはいえないものの、) 第二次よりかなり減少しているという点に関して、その理由は不明である。これまではあまり詳細に検討されてこなかったが、「新しい」と考えられるような言語変化の場合、その初期においては一種の「逡巡期 (混乱期?)」のようなものがあり、必ずしも変化が一方的な (増加の) 方向に進むわけではないという状況の一端が、ここに現われているのかもしれない。この点に関しては、今後の更なる検証が必要となるだろう。

一方、(iii) の点に関しては、言語変化に関するもう一つの特性を象徴する結果として、興味深いところである。そもそも (g) の例は、1996 年の時点で「なく中止形」の実例が見られた (a) ~ (f) のような場合と比較して、性格的に異なると考えられるものとしてアンケートの内容に加えられたものであり、その他の場合が共通の性格として何らかの状態的な意味を有しているのに対して、そうした (状態的な) 意味を持たない例として採用されたものである。この点についての詳細な分析については、既に発表したいくつかの参考文献に譲るが、結果的に、「なく中止形」への変化を最も受け容れにくい状況としての (g) のような場合に変化の兆しが見られるかどうかという点で、「なく中止形」全体の構造的な変化が進むか否かという問題に関して、大きな鍵を握っているように思われる。

5. おわりに

一般的な話として、言語における変化現象に関して語彙的な場合と文法的な場合を比較すると、容易かつ比較的短時間の間に変化が起こりやすい語彙的部分に比べて、例えば、五十年以上に亘って多かれ少なかれ“ゆれ”の状態が続いていると言える「ラ抜き」の場合が典型的なように、文法的な部分はそう簡単に短時間では変化が進まないものと考えられる。「なく中止形」という現象に関しては、これまで発表してきた研究結果から考えて、多分に体系的な背景を有する文法面での言語変化の一つであろうと考えられるだけに、一応の

若年層である大学生に対象を限るとしても、その変化の様相を長期的に見通すということは、容易なものではないと想像できる。

たまたま、この現象に最初に気付いたのが 1990 年代であったため、私のその後の研究者としてのキャリア継続を利用して、第一次のものと同様の条件で、十年後・二十年後の実態ということで、同一アンケートの実施を継続することができた。その結果や分析については、前節までに述べた通り、必ずしも単純な推移とはなっていない部分も見られるが、元々は個人の興味に基づく現象に関して、ある程度の時間的間隔を置いて継続的に経年的な調査を行なうことが出来ているという点において、この分野の中では貴重なものとして評価できるところもあるのではないかと考えている。

実際の年齢でも、また研究の世界でも、既に十分「晩年」に近付いている私にとって、今回に続く第四次や第五次のアンケート調査が実施できるかどうかという点については、かなり心許無いと言わざるを得ない。願わくば、何らかの幸運な展開が今後起こって、そうした流れの継続が実現できるとすれば、私にとってこれ以上の喜びはないと言える。

皆さま方からのさまざまなご支援を、今後とも切にお願い申し上げる次第である。

〈参考文献〉

- 金沢裕之 (1997) 「助動詞「ない」の連用中止法について」『日本語科学』1
 金澤裕之 (2008) 『留学生の日本語は、未来の日本語—日本語の変化のダイナミズム—』 ひつじ書房
 寺村秀夫 (1991) 『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』 くろしお出版

〈謝辞〉

今回 (第三次) の調査を行うに当たっては、次の方々からのご協力をいただいた。ここに記して、改めて感謝を申し上げます。

湯浅茂雄・山内博之・福嶋健伸 (ともに、実践女子大学)